

# Instagram 上での「いいね！」に見られる 日本人の褒め行為の様相に関する考察

A Consideration of “iine!” as a Compliment by Japanese Users of Instagram

村 端 啓 介

Keisuke MURAHATA

## 要旨

現在の日本の英語教育では、従来の英文訳読を中心とした授業内容だけではなく実際に他者と英語でコミュニケーションを図る際に実用的な言語能力育成に向け、言語のアウトプットを中心とした授業が重要視されてきている。しかし実際には、英語母語話者が英語を様々な場面でどう使うかといった語用論教育はまだそこまで広く浸透していない。頭で組み立てた文法的には正しい文章でも、それらをただそのまま口に出すだけでは本来意図したことが相手に伝わらない恐れがある。その語用論教育を進めるためには、まず自らが日本語母語話者として言語をどのように使うか知る必要がある。本論では、英語と日本語の母語話者ではその使用が文化的に異なる「褒め行為」について、英語学習者である10代、20代の日本人英語学習者を対象とした褒めに関する研究の意義を考察する。近年、若者の利用者数が増えてきている Instagram 上での「いいね！」をもとに現在の彼らの褒めに関する様相を明らかにし、英語母語話者の褒めの在り方を理解・習得することを最終的な目的とする。

キーワード：SNS、Instagram、語用論、英語教育、褒め、ポライトネス

## 1. はじめに

近年の Social Network Service (SNS) 使用人口の増加に伴い、流行語にもその影響が出た。2017年度の自由国民社のユーキャン新語・流行語大賞に選ばれた言葉は「インスタ映え」で、これは Instagram というスマートフォンやタブレットで使用されるアプリケーションに写真を投稿する際に、その写真の被写体が見栄え良く映ることを表す造語である。そしてその「インスタ映え」する写真をアプリへ投稿することによって得られる「いいね！」をいかに多く獲得できるかが、Instagram を使用する動機の一つとして大勢の利用者を生み出している。

この近年多くの人々が使用している Instagram での「いいね！」という褒め言葉を他者に対する評価の結果としての褒め行為とし、その動機や本意を探ると、現在の日本人英語学習者にとっての褒めの様相を明らかにする手がかりになるかもしれない。そして目標言語である英語母語話者の褒め行為と対比することで、その言語使用の文化的側面の習得を目的とした授業作りが可能になる。今後の日本の英語教育で必要になるであろう語用論教育に対しての新たなアプローチを探るべく、本論では、日本人のこの SNS 上での「いいね！」をする・される行為に見られる現在の日本人特有の褒めに関する様相を導き出すことの重要性と、またそこから英語での褒め行為を学習・獲得するために何が必要かを論じる。

## 2. 褒め行為の英語教育導入推進について

### 2.1 語用論教育の必要性

日本の英語教育の現在の動向としては、言語の文化的側面に重点を置かない授業が主流となっており、それが今後の課題としてしばしば議論されている。まず小学校では歌やゲームを用いる、限られた範囲での言語使用にのみ焦点を当てた英語の音に慣れるためだけの授業が外国語活動として展開されている（村端, 2018）。中学校・高校に上がって英語が教科として教えられるようになって、教科書を中心に英文を音読、そして生徒に一文ごとに訳をさせてその正誤を確認するといった文法訳読方式が主流となっている（白井, 2008）。よって、「人々は実際に英語をどう使うか」という視点に基づく、本来のコミュニケーション能力に関するスキル向上のための授業は日本の英語教育では行われていない。つまり、高校を卒業するまでの日本における英語学習では、実際の対人コミュニケーションに焦点を当てた内容の授業を学習者が受ける時間は極めて短く不十分であることがわかる。

このような語用論教育の欠如がもたらすのは、例えば、英語母語話者とコミュニケーションをとる際にその状況や相手の文化的背景をもとにした情報交換が不可能になり、結果としてコミュニケーションに問題を生じさせることである（Thomas, 1983）。さらに、Hymes (1971) は *communicative competence*（コミュニケーション能力）を正しい文法で文章を組み立てられる能力だけではなく、適切な場面に応じた文章を生産する能力もその定義として英語教育での語用論教育の必要性を示唆している。これからの英語教育では、文法偏重型のような言語の表面的な側面だけではなく、実際のコミュニケーションの場で英語がどう使われるかに重きをおくべきである。

### 2.2 現在の日本の英語教育での褒めの扱い

#### 2.2.1 褒め行為の定義

まず、本論での褒めの定義をここで定めたい。褒め行為の定義について Holmes (1988) は、発話者以外のある人物に関する事柄について明示的もしくは暗示的に行われる、その受け手または聞き手にとって肯定的な評価を行う言語行為であるとしている。この定義に対して Herbert (1989) の定義ではその機能について述べられている。彼の定義によると、褒め行為によって、その発話者と受け手の間に社会的な結束がもたらされる効果があるという。上記の二者の定義にはそれぞれ異なる観点からの褒めを捉えた特徴が見られることを踏まえて、ここでは双方の特徴を合わせた以下のものを定義として使用する。本論における褒めとは、発話者以外のある人物に関する事柄について明示的または暗示的に行われる肯定的な評価で、その発話者と受け手に社会的な結束を生み出す言語行為である。

#### 2.2.2 日本の英語教育での褒め

語用論教育が不十分な日本の英語教育では、言うまでもなく、英語母語話者がいかに褒めをコミュニケーションの一環として使用するかについての授業が行われていることはあまり期待できない。理由としては、進学や就職を目的とする日本で生活する上で必要な英語能力に、褒

めを代表とする語用論的な言語使用に関する能力が含まれていないことが考えられる。言い換えれば、英語での褒め方を学んでもテストの点や成績は上がらないということである。このことが上で述べた日本の英語教育での語用論的な言語使用を考慮した授業が少ない理由にもなり、必然的に褒め行為を教授する機会が少なくなる。

場合によっては教師が生徒を褒める場面が教室内で見られることもあるかもしれないが、せいぜい教師の問いに対して生徒が正解を出した時にそれを褒める程度のものであると考えられる。Murahata (2016) が分類した褒めのトピックである、能力 (ability)、見た目 (appearance)、所有物 (possession)、そして社会的地位 (social status) をもとに考えると、日本の英語学習で教室内で扱われるであろう褒めは、おそらくその正解を当てるという能力 (ability) に対して褒めるという状況に限定される可能性が高い。見た目や所有物といったトピックを対象とした、本来の母語話者間での使用に触れる機会がどれほどあるだろうか。このままではいつまでたっても本当の意味で「英語が使える」日本人は排出されることがない。

### 2.3 褒め行為を英語学習へ導入する利点

褒め行為の英語教育への導入において三つの利点が考えられる。第一に、褒め行為自体に生徒の学習意欲を促進させる心理的効果があることである (青木, 2005; 古市, 柴田, 2013; 吉田, 戸田, 2004)。教師から学習に対する肯定的評価を受けることは生徒にとって喜ばしいことであり、結果的に生徒の外的動機付けを強化する可能性がある。生徒同士の褒め行為も同様に、褒め行為を通してクラス内での自己肯定感を強める効果が期待できる。

次に、褒め行為を学習・習得することによる異文化の語用論的能力の獲得によって、学習者のコミュニケーション能力が強化されるという言語的効果も考えられる。Murahata (2016) が行った研究によると、留学を通して長期的な第二言語使用を経験した英語学習者は、留学経験のない母語話者と比べて褒め行為の使用に関してコミュニケーション能力が上がった。具体的には、一年以上の留学経験者によって褒め行為として発話された文章の終わりには、話者自らが質問文を追加し、相手からより詳しい情報を得ようとする傾向があった。それに加えて、留学経験者が褒め行為を行う際には、留学経験が無い日本語母語話者と比べて使用した形容詞が幅広く、それにより多角的に物事を表現するようになった。英語学習へ褒め行為を導入し長期的に英語での褒めを学習することで、英語だけではなく母語でも学習者のコミュニケーション能力が向上することが望める。

今後英語を通じて世界の様々な人々と交流することを最終的な学習到達目標とするならば、より高い学習意欲を持ってコミュニケーション能力の向上を図るためにも、英語での褒め行為を学習する場を設けるべきであると考えられる。そのためにも、現在の日本人英語学習者にとっての褒め行為の様相をさらに明らかにしていく必要がある。

## 3. 日本人の褒め行為

### 3.1 英語の褒めと比較した日本語の褒め

ここでは Instagram で見られる褒めの「いいね！」を考える前に、日本語での褒めを考えるた

め、英語学習者にとって目標言語である英語での褒めと比較をしてみる。まずは、日本語母語話者と英語母語話者の褒め行為について、それぞれの母語話者集団が持つ礼儀に対する価値観が根本的に異なることを考えなければならない。Brown & Levinson (1987) が提唱した「フェイス (face)」の概念によると、社会的グループに属するメンバーが他者と関わる際に相手に求める欲求として、他者から邪魔されたくないという「ネガティブフェイス (negative face)」か、他者に自己を認められたいという「ポジティブフェイス (positive face)」を持ち合わせている。この分類によると、日本人はネガティブフェイスを配慮した言動をもとに対人コミュニケーションを行う傾向にあるのに対し、英語母語話者は対話者のポジティブフェイスを考慮する傾向にある。つまり、それぞれの文化に属する人々が持つこれらのフェイスが、いかにして褒め行為を行うかに大きく影響することになる。

日本語と英語の褒め行為を比較した際に最も顕著な違いの一つとしては、褒める頻度があげられる。日本人は英語母語話者に比べると褒める頻度が低い (Barnlund & Araki, 1985)。これは褒めるという他者への主観的評価行為が、褒めの対象である日本人が持つネガティブフェイスを脅かすのを避けるため、結果的に頻度が低くなるとも考えられる。特に日本では、目上の者への配慮が社会ルールとして期待されており、他者を評価するという褒め行為自体に年齢的な制限がある (大野, 2007)。つまり若い者が年上を褒めることは、上記で触れた対話者のフェイスを脅かす行為として判断される場合が多いということであり、それが褒めの頻度の低さの理由の一つとして考えられる。それに比べて英語母語話者間では褒め行為の制限が日本語母語話者より緩く、その結果会話の導入に褒め行為が使用されることもあるように、褒める頻度が日本人より多い (Wolfson, 1983)。他者に認められたいという欲求が強い英語母語話者にとって、褒め行為は日常的な使用が高くなることは容易に想像がつく。

頻度に次ぐ明確な英語と日本語での褒め行為の相違点は、その褒めへの返答にある。特に目上の者が対話者となるコミュニケーションの場では謙遜することが暗示的に求められる日本語母語話者にとって、褒めのような他者からの肯定的評価に対する返答にも否定表現や回避を用いて謙遜を表すことが期待されている (柏木, 2017; 鈴木, 2002)。受けた褒めことばを頭では肯定的に捉える場合もあるとしても、受け手が言語化するのには否定または回避表現であり、これは英語母語話者には見られない行為である。

ここで比較した通り、日本語母語話者と英語母語話者では褒め行為の扱いが文化的に異なる。このような言葉の裏にある文化的背景をも英語学習に取り入れることが今後の日本の英語教育で重要であり、そのために日本語母語話者の褒めの様相を多角的に捉える研究が必要である。

#### 4. Instagram と褒め行為

本論文では、現在の日本人英語学習者の褒め行為の様相の一片を探ることを最終的な目的としている。そのために、以下では Instagram で見られる「いいね!」を研究対象とする上で、その着目することとなった理由と、実際にデータを用いた研究の先行研究として「いいね!」を用いたコミュニケーションについての考察を述べていく。

#### 4.1 Instagram とは

ここではまず、Instagram とはどのようなものなのかをここで触れておく。Instagram とはスマートフォンで無料で使用出来る写真共有 SNS である。2010 年より Apple Store で提供が開始され、2014 年から日本語でのアカウントが開設された。

主な機能としては、写真投稿機能によりアップロードされた写真に対してコメントを入力したり、その写真に対して「いいね！」という意思表示が可能である。「いいね！」は投稿された画像をタップするか、または画像下に置かれているハートマークをタップするだけでその意思表示ができる。そしてその写真ごとに何件「いいね！」を獲得したか、誰が「いいね！」をしたかが表示される。その他にもメッセージのやり取りができる機能や、投稿画像にハッシュタグをつけることで、そのハッシュタグを用いて他者が投稿した画像を検索することができる。

使用目的は、主に実際の友達や SNS 上だけのフォロワー同士で写真を共有することである。投稿した画像は不特定多数のユーザー向けに公開することも、自分のフォロワーだけに公開を制限することもできることから、友達内で写真共有するユーザーもいれば幅広い人たちとの交流を図るユーザーもいる。はじめに触れたように流行語大賞で「インスタ映え」が選ばれたことから、現在多くのユーザーがインスタ映えする画像を投稿し、より多くの「いいね！」を獲得することに価値を見出していると言える。

#### 4.2 なぜ Instagram に注目するか

次に、なぜ Instagram で見られる「いいね！」のやり取りに着目したか、その理由についてここで述べる。Instagram を褒め行為の研究対象として有意義であると言える理由は、Instagram の利用率が高い年齢が、学校で英語学習を受ける年齢と重なっていることである。総務省情報通信政策研究所（2017）が 13 歳から 69 歳までの男女 1500 人を対象に行った調査によると、平成 28 年度の Instagram 利用者で一番多い年代は 20 代で、その利用率は 45.2% であった。それに次いで 10 代の利用率が二番目に高く 30.7% で、その次が 30 代で利用率は 30.3% だった。日本人英語学習者にとっての褒め行為の様相を明らかにすることを目的とすると、英語学習対象者である 10 代から 20 代の利用率が高い Instagram を対象とする研究は有益であると考えられる。そして上記でも触れたように平成 29 年の流行語大賞で「インスタ映え」というフレーズが選ばれたことから、Instagram の日本社会での浸透度は比較的高く、今後もその利用者が増えていくだろう。そのようなインターネット上での言語使用を通じて日本語母語話者の言語使用の動向を明らかにする可能性があることがその理由である。

#### 4.3 Instagram で見られる褒め「いいね」とは

##### 4.3.1 「いいね！」という褒め言葉について

まず、日本語での「いいね！」とは、肯定的評価語である「いい（良い）」という形容詞に「ね」という終助詞が加えられ、さらに語末に感嘆符を置く褒め言葉である。2.2.1 で述べた定義にもある、他者への肯定的評価を下すという行為に使用される言葉であることから、これは褒め言葉に該当する。この言葉には、発話者の年齢や性別を限定する役割語（金水、2003）が

見られないことから、日本語話者であれば誰しもおかしくない言葉であり、年齢や性別を超えた幅広いユーザーが Instagram を使用することを想定した上で決定された言葉であることがわかる。そして、会話など口頭で使用される場合や小説などで見られる文語としては、「いいね！」は単純な褒め言葉であり、使用される文脈でその意味は変化する。以下では、使用される状況がある程度制限される Instagram での「いいね！」にはどのような特徴があるのかを考察していく。

#### 4.3.2 Instagram での「いいね！」の特徴

まず大きな特徴として、その意思伝達の仕方が考えられる。投稿された画像に「いいね！」を用いて褒め行為を実行する場合、その発信者がスマートフォンまたはタブレット上で画像をダブルタップするか、または画像下にあるハートマークへのタップをすることになる。そして「いいね！」をする行為自体に、アプリケーション上で受け手が何かしらのリアクションをすること無く褒め行為が完結する。つまり実際に誰かと顔を合わせてのコミュニケーションではないということである。よって、Instagram に見られる「いいね！」は実際に人と対面して行う褒め行為よりも一方的である。

それに加え、「いいね！」をした発信者が本来意図した褒め言葉が一定ではない可能性があることも一つの特徴としてあげられる。アップロードされた画像に対して「かわいい」や「かっこいい」と思っていたとしても、コメントを用いずに「いいね！」だけした場合、最終的に表示されるのは「いいね！」が一件つくことだけである。

さらに、そもそも褒め行為を目的とせずに「いいね！」が使用される場合も考えられる。例えば、アップロードされた画像を閲覧したことをただ知らせる目的でも「いいね！」が使用される可能性があり、また画像に対して褒めの感情ではなく共感したことを表現する場合も考えられる。そして投稿された画像には合計で何件、そして誰から「いいね！」を受けたかが表示されることから、実際の友達を含む多くの人が「いいね！」をしているから自らも便乗するという、他者依存型「いいね！」が存在する可能性もある。

このように Instagram で見られる「いいね！」という褒め言葉を使用したコミュニケーションには、実際に人と顔を合わせるコミュニケーションとは異なる特徴がある。「いいね！」が褒め行為として使用されることを前提としてもその発信者の真意は見えないことがある。以下では Instagram をもとにした日本語母語話者の褒め行為の様相を探る研究を行うために、ここで触れた特徴を踏まえた上で、どのような項目に関して調査をするべきかを考える。

#### 5. 今後の研究について

日本人英語学習者が英語での褒め行為を学習・習得することを最終的な目的として彼らの褒めの様相を明らかにするために、Instagram で見られる「いいね！」を対象にどのような項目について調査をするべきか以下では述べていく。ここでは調査項目を褒める側と褒められる側の二つのカテゴリに分け、今後の研究に向けてそれぞれの調査項目についてまとめる。

## 5.1 褒める側としての調査

まずは褒める側としての Instagram ユーザーの褒めの様相を探るために、研究余地のある項目をここでまとめる。一つ目の研究的疑問は、「いいね！」をする際に発信者が本来意図する褒め言葉は何か、である。上でも述べたが、「いいね！」を使用して褒め行為を実行したとしても、発信者がアップロードされた画像をどう評価したのかが受け手または第三者にはわからない。どのような画像を目にした時に「いいね！」をするのかを調査することで、Instagram ユーザーの「いいね！」の表面下に隠れた褒め言葉の種類と頻度がわかる。

次に、調査対象者がよく「いいね！」をする人、または「いいね！」をするのに抵抗がある場合はどのような相手であるか、が二つ目の研究的疑問である。実際の対人コミュニケーションと異なり、Instagram では自分がフォローしている友達、芸能人、またはフォローもしていないランダムに見つけた人というように、「いいね！」の対象がアプリケーション上で明確に区別することができる。それぞれが写真をアップロードした場合、その対象に「いいね！」をする行為の難易度について調べることで、Instagram ユーザーの「いいね！」を用いた褒め行為対象の範囲を知ることができる。

褒める側としての調査における最後の疑問として、「いいね！」ではなくコメント機能を用いる場合はどのような状況なのか、が考えられる。「いいね！」をするかコメントを残すかはユーザーの選択であるが、コメントで褒めることを選択した場合なぜその選択をするのか、その動機を調査することで、褒め行為に対する意識の度合いについて明らかにできる可能性がある。

## 5.2 褒められる側としての調査

次に褒められる側としての調査項目について考察をしていく。まずは、「いいね！」をされることで受け手側が「嬉しい」など肯定的な感情を抱くのはどのような場合なのか、またその程度について調査することで、褒めの心理的効果の条件をより明確にすることができる。例えば、自分がアップロードした画像に多数の「いいね！」がつくことに喜びを感じるのか、その数はどの程度なのか、また誰から「いいね！」をもらうことに幸福感を得るのか、などに関してのデータ収集が有益であると考えられる。

上記の項目に加え、そもそもなぜ画像をアップロードするのか、その動機を明らかにすることで日本人 Instagram ユーザーの褒めを用いたコミュニケーションの実態の一片がわかる。褒めの頻度が少ないと言われる日本人母語話者であるが、なぜ「インスタ映え」という言葉が流行語になるほど、「いいね！」という褒め言葉を獲得することに価値を見出しているのだろうか。新しく SNS と英語教育のあり方を考える時にも、このアプリケーションのユーザーに対して使用する動機を調査することは意義があると言える。

## 6. 終わりに

現在の英語教育で欠けているであろう語用論教育の強化に向けて、本稿では褒め行為の導入を推進している。単に英語を組み立てる授業だけでなく、これからは組み立てた英語をどう使うか、それぞれの話者の文化的背景に着目することも必要になる。そのためにも、まずは我々

が英語を話す時にベースとなる自己の文化を知ることが急務である。本論で触れてきたように Instagram という SNS の場での褒め行為に関して、英語学習者はどのように褒め行為をコミュニケーションの一環として使用するのか、その調査の余地は大きい。その結果をもとに、これからの英語教育に向けて新しいアプローチを生み出すことを最終的な目標とし、今後の研究を進めていきたい。

---

#### 参考文献

- 青木直子 (2005) 「ほめることに関する心理学的研究の概観」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科, 紀要, 52, 123-133.
- 大野敬 (2007) 「ほめ意図表現」の枠組みと機能. *早稲田日本語研究*, (16), pp.109-120. Retrieved from <http://ci.nii.ac.jp/naid/120002402412/en/>
- 柏木厚子 (2017) 「インタビュー番組におけるほめの返答の日米比較——非言語データも含めた発話分析——」 *学苑*, (919), 1-14.
- 金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店.
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学』 岩波書店.
- 鈴木理恵 (2002) 「褒めの返答に対する褒め提示側の印象度分析」 *国際基督教大学学報 3-A, アジア文化研究*, (28), 83-108.
- 総務省情報通信政策研究所 (2017) 「平成 27 年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」 ([http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000492875.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000492875.pdf))
- 古市裕一・柴田雄介 (2013) 「教師の賞賛が小学生の自尊感情と学校適応に及ぼす影響」 *岡山大学大学院教育学研究科研究集録*, 154, pp.25-31.
- 村端啓介 (2018) 「語用論的言語使用「褒め」の小学校英語への導入とその教育的意義についての考察」 *神戸英語教育学会紀要*, 33, 17-31.
- 吉田典史・戸田弘二 (2004) 「小学生の学習方略と原因帰属及び学習意欲との関連」 *北海道教育大学紀要 (教育科学編)*, 54 (2), pp.15-31.
- Barnlund, D., & Araki, S. (1985). Intercultural encounters: The management of compliments by Japanese and Americans. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 1, 9-26.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978, 1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Herbert, R. K. (1989). The ethnography of English compliments and compliment responses: A contrastive sketch. *Contrastive pragmatics*, 3-35.
- Holmes, J. (1988). Paying compliments: A sex-preferential politeness strategy. *Journal of pragmatics*, 12 (4), 445-465.
- Hymes, D. (1971). Competence and performance in linguistic theory. *Language acquisition: Models and methods*, 3-28.
- Murahata, K. (2016). *The effects of learning and experiencing English on Japanese English users' L1 pragmatic competence in terms of giving compliments*. Retrieved from ProQuest. (10251646)
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4, 91-112.
- Wolfson, N. (1983). An empirically based analysis of complimenting in American English. *Sociolinguistics and language acquisition*, 82-95.